

Kokoro – Sensei’s Testament – Parts 47-56 (Natsume Sōseki)

よんじゅうしち
四十七

「私わたくしはそのまま二、三日さんにちす過ぎました。その二、三日の間あいだ Kに対する絶えざる不安ふあんが私の胸むねを重くしていたのはいうまでもありません。私はただでさえ何とかなければ、彼かれに済まないと思っただけです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突っつくように刺戟しげきするので、私はなお辛つらかったです。どこか男らしい気性を具えた奥さんは、いつ私の事ことを食卓しょくたくでKに素は抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心こころを曇らす不審ふしんの種たねとならないとは断言だんげんできません。私は何とかして、私とこの家族かぞくとの間に成り立った新しい関係かんけいを、Kに知らせなければならぬ位置いちに立ちました。しかし倫理的に弱点りんりてきをもっていると、自分で自分を認めている私には、それがまた至難しなんの事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそうしてもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目めんぼくのないのに変わりはありません。といて、拵こしらえ事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由りゆうを詰問きつもんされるに極きまっています。もし奥さんにすべての事情じじょうを打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝け出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用しんように関するとは思われなかったのです。結婚する前から恋人の信用しんようを失うのは、たとえ一分厘でも、私には堪え切れない不幸ふこうのように見えました。

要するに私は正直な路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに気がついているものは、今のところただ天と私の心だけだったのです。しかし立ち直って、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑った事をぜひとも周囲の人に知らなければならぬ窮境きゅうきょうに陥ったのです。私はあくまで滑った事を隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟まってまた立ち竦すくみました。

五、六日経った後、奥さんは突然私に向って、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと言えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えていてます。

「道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」

私はKがその時何かいいはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にもいわないと答えました。しかし私は進んでもっと細かい事を尋ねずにはられませんでした。奥さんは固より何も隠す訳がありません。大した話もないがといいながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんのいうところを総合して考えると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口いっただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「おめでとうございます」といったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事ができません」といったそうです。奥さんの前に坐っていた私は、その話を聞いて胸が塞るような苦しさを覚えました。

よんじゅうはち
四十八

「勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかったのも、私は全くそれに気が付かずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遥かに立派に見えました。「おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑している事だろうと思って、一人で顔を赧らめました。しかし今更Kの前に出て、恥を搔かせられるのは、私の自尊心にとって大いな苦痛でした。

私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然とします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切っているKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肘を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点っているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合っているのです。そうしてK自身は向うむきに突っ伏しているのです。

私はおいとって声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上って、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻してみました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子で作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策ったと思いました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の横たわる全生涯を物凄く照らしました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事ができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛になっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私にとってどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があったのです。私はちょっと眼を通しただけで、まず助かったと思いました。(固より世間体の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。)

手紙の内容は簡単でした。そしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するというだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあっさりとした文句でその後につけ加えてありました。世話ついでに死後の片付方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜しく詫をしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだらうという意味の文句でした。

私は顫える手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆なの眼に着くように、元の通り机の上に置きました。そうして振り返って、襖に迸っている血潮を始めて見たのです。

よんじゅうく
四十九

「私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかったのです。しかし俯伏しになっている彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触った冷たい耳と、平生に変らない五分刈の濃い髪の毛をしばらくながし眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかったのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能を刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなったこの友達によって暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室に帰りました。そして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。私の頭は無意味でも当分そうして動いていると私に命令するのです。私はどうかしなければならぬと思いましたが、同時にもうどうすることもできないのだと思いました。座敷の中をぐるぐる廻らなければならぬと思えたのです。檻の中へ入れられた熊のような態度で。

私は時々奥へ行って奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮ります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かす事は、とてもできないという強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。

私はその間に自分の室の洋燈を点けました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒の明かない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明に間もなかった事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではなかろうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行ったのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だといっ注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちょっと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不断着の羽織を引っ掛けて、私の後に跟着て来ました。私は室へはいるや否や、今まで開いていた仕切りの襖をすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事ができたと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は頤で隣の室を指すようにして、「驚いちゃいけません」といいました。奥さんは蒼い顔をしました。「奥さん、Kは自殺しました」と私がまたいいました。奥さんはそこに居竦まったように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「済みません。私が悪かったのです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫まりました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかったのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らずそうってしまったのです。Kに詫まる事のできない私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫びなければいられなくなっただと思っ下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈しなかったのは私にとって幸いでした。蒼い顔をしながら、「不慮の出来事なら仕方がないじゃありませんか」と慰めるようにいってくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられたように、硬く筋肉を攪んでいました。

「私^{わたくし}は奥^{おく}さんに気^きの毒^{どく}でしたけれども、また立^たって今^{いま}閉^{しま}めたばかりの唐紙^{からかみ}を開^あけました。その時^{とき}Kの洋燈^{ランプ}に油^{あぶら}が尽^つきたと見^みえて、室^{へや}の中^{なか}はほとんど真^ま暗^{くら}でした。私^{わたし}は引^ひき返^{かえ}して自分^{じぶん}の洋燈^てを手^{ても}持^もったまま、入^{いり}口^{ぐち}に立^たって奥^{おく}さん^{かえり}を顧^{うし}みま^かした。奥^{おく}さんは私^{わたし}の後^{うし}ろから隠^{かく}れるようにして、四^よ畳^{じょう}の中^{なか}を覗^{のぞ}き込^こみま^かした。しかしはいろ^いろ^ろとはし^ません。そこはそのままにしてお^あいて、雨^{あま}戸^どを開^あけてくれと私^{わたし}にいい^ました。

それから後^{あと}の奥^{おく}さん^{たいど}の態^{たいど}度は、さ^ぐすがに軍^{ぐんじん}人^{びぼうじん}の未^よ亡^{うりよう}人^えだけあ^つて要^{ようりよう}領^えを得^えていま^ました。私^{わたし}は医^い者^{しゃ}の所^{ところ}へも行^ゆきま^かした。また警^{けい}察^{さつ}へも行^ゆきま^かした。しかしみ^めんな奥^{おく}さん^{めいれい}に命^{めい}令^{れい}され^て行^いったの^のです。奥^{おく}さん^{てつづき}はそ^すう^だした手^た続^れの済^いむま^で、誰^{だれ}もKの部^へ屋^やへは入^いれま^せん^でした。

Kは小^{ちい}さなナイフ^{けいどうみやく}で頸^き動^{ひといき}脈^しを切^しって一^ほ息^かに死^きん^ずでしま^なったの^のです。外^ほに創^きら^ずしいもの^{なん}は何^{なん}にもあ^りま^せん^でした。私^{わたし}が夢^{ゆめ}のよ^うな薄^{うす}暗^{くら}い灯^ひで見^みた唐^ち紙^{しお}の血^{かれ}潮^{くびすじ}は、彼^いの頸^い筋^{いちど}から一^い度^{ちど}に^いちど^に進^しったもの^{もの}と知^しれま^かした。私^{わたし}は日^に中^{ちゆう}の光^{ひかり}で明^あら^かにそ^の迹^{あと}を再^あと^ふた^たな^がび眺^{なが}めま^かした。そう^して人^{にんげん}間の血^ちの勢^{いきお}いとい^うもの^{もの}の劇^{はげ}しいの^のに驚^{おどろ}きま^かした。

奥^{おく}さん^{てぎわ}と私^{わたし}はで^きる^くだ^けの手^も際^ちと工^{そう}夫^じを用^いいて、Kの室^{そうじ}を掃^{そうじ}除^じしま^した。彼^だの血^だ潮^{いぶん}の大部分^{だいぶぶん}は、幸^{さいわ}い彼^かの蒲^{ふとん}団^{きゆうしゆう}に吸^あ取^とされてしま^たったの^ので、畳^{たたみ}はそれ^よほど汚^{よご}れな^いで済^いみま^かしたか^ら、後^{あと}始^{しま}つ^たはま^だ楽^{らく}で^した。二^ふ人^{たり}は彼^しの死^{しが}骸^{がい}を私^{わたし}の室^{ふだん}に入^とれて、不^お断^ねの通^{てい}り寝^{よこ}てい^る体^{てい}に横^{よこ}に^しま^した。私^{わたし}はそれ^じから彼^{でんぼう}の实^う家^でへ電^{でん}報^{ぱう}を打^{うち}に^で出^でたの^のです。

私^{わたし}が帰^{かえ}った時^{とき}は、Kの枕^{まくら}元^{もと}にもう線^{せんこう}香^{こう}が立^たてら^れていま^ました。室^{むろ}へはい^いるとすぐ^{すぐ}仏^{ほとけ}臭^{くさ}い^い烟^{けむり}で鼻^{はな}を撲^うたれた私^{わたし}は、その烟^{けむり}の中^{なか}に坐^{すわ}っている女^{おんな}二^{ふた}人^りを認^みめま^かした。私^{わたし}がお嬢^{じょう}さん^{さん}の顔^{かお}を見^みたのは、昨^{さく}夜^や来^{らい}この時^{とき}が始^はめて^でした。お嬢^{お嬢}さん^{さん}は泣^ないていま^ました。奥^{おく}さん^めも眼^めを赤^{あか}く^していま^ました。事^じ件^{けん}が起^{おこ}って^からそれ^{こと}ま^{わす}で泣^なく事^{こと}を忘^{わす}れて^いた私^{わたし}は、その時^{とき}よう^やく悲^{かな}しい^い気^き分^{ぶん}に誘^{さそ}わ^れる事^{こと}が^むね^ねで^きた^たの^のです。私^{わたし}の胸^{むね}はそ^の悲^{くつ}しさ^さのた^めに、ど^のく^らい寛^{くわん}ろ^ろい^だか知^ちれ^ませ^ん。苦^く痛^{つう}と恐^{きよう}怖^ふでぐ^いと握^{にぎ}り締^しめ^られた私^{わたし}の心^{こころ}に、一^い滴^{てき}の潤^{うる}を^おい^あた^たえて^くれ^たもの^{もの}は、その時^{とき}の悲^{かな}しさ^さで^した。

私^{わたし}は黙^{だま}って二^ふ人^{たり}の傍^{そば}に坐^{すわ}っていま^ました。奥^{おく}さん^{せんこう}は私^{わたし}にも線^{せんこう}香^{こう}を^あ上^あげ^てや^れと^いい^ます。私^{わたし}は線^{せんこう}香^{こう}を^あ上^あげ^てま^だ黙^{だま}って^いま^ま坐^{すわ}っていま^ました。お嬢^{お嬢}さん^{さん}は私^{わたし}には何^{なん}とも^いい^ませ^ん。た^まに奥^{おく}

さんと一口二口言葉を換わす事がありました、それは当座の用事についてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余裕がまだ出て来なかったのです。私はそれでも昨夜の物凄い有様を見せずに済んでまだよかったと心のうちで思いました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しさが、そのために破壊されてしまいそうで私は怖かったです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度外に置いて行動する事はできませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつと同じような不快がそのうちに籠っていたのです。

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋めるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司ヶ谷近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入っていたのです。それで私は笑談半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬ったところで、どのくらいの功德になるものかとは思いました。けれども私は私の生きている限り、Kの墓の前に跪いて月々私の懺悔を新たにされたのです。今まで構い付けなかったKを、私が万事世話をした来たという義理もあつたのでしょう、Kの父も兄も私の事を聞いてくれました。

ごじゅういち
五十一

「Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだろうかという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早くお前が殺したと白状してしまえという声を聞いたのです。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛で書き残した手紙を繰り返すだけで、外に一口も付け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によって指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世的な考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にもいわずに、その新聞を畳んで友人の手に帰

しました。友人はこの外にもKが気が狂って自殺したと書いた新聞があるという教えてくれました。忙しいので、ほとんど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹の中では始終気にかかっていたところでした。私は何よりも宅のものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪らないと思っていたのです。私はその友人に外に何とか書いたのではないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引っ越したのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭がりますし、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極めたのです。

移って二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから、目出度といわなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随いていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなかろうかと思いました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻といいます。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓参りをしようといいい出しました。私は意味もなくただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人揃ってお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうというのです。私は何事も知らない妻の顔をしげじけ眺めていましたが、妻からなぜそんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。

私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗ってやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになった顛末を述べてKに喜んでもらうつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ自分が悪かったと繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫でてみて立派だと評していました。その墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行って見立てたりした因縁があるので、妻はとくにそういいたかったのでしょう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋められたK

の新しい白骨^{はっこつ おも くら}とを思い比べて、運命^{れいば かん}の冷罵^{れいば}を感じずにはいられなかったのです。私はそれ以後^{いごけっ}決して妻といっしょにKの墓参りをしない事にしました。

ごじゅうに
五十二

「私^{わたくし}の亡友^{ぼうゆう}に対するこうした感じ^{かん}はいつまでも続^{つづ}きました。実は私も初めからそれを恐^{おそ}れていたのです。年来^{ねんらい}の希望^{きぼう}であった結婚^{けっこん}すら、不安^{ふあん}のうちに式^{しき}を挙げたといえはいえない事^{こと}もないでしょう。しかし自分で自分の先^{さき}が見えない人間^{にんげん}の事ですから、ことによるとあるいはこれが私の心持^{こころもち}を一転^{いってん}して新しい生涯^{あたら しょうがい}に入る端緒^{はい}になるかも知れないとも思^{おも}ったのです。ところがいよいよ夫^{おつと}として朝夕妻^{あさゆうさい}と顔^{かお}を合^{あわ}せてみると、私の果敢^{はか}ない希望^{きぼう}は手厳^{てきび}しい現実^{げんじつ}のために脆^{もろ}くも破壊^{はかい}されてしまいました。私は妻と顔を合^{あわ}せているうちに、卒然^{そつぜん}Kに脅^{おびや}かされるのです。つまり妻が中^{ちゆうかん}間に立^たって、Kと私をどこまでも結^{むす}び付けて離^{はな}さないようにするのは、妻のどこにも不足^{ふそく}を感じない私は、ただこの一点^{いってん}において彼女^{かのじよ}を遠^{とお}ざけたがりしました。すると女^{おんな}の胸^{むね}にはすぐそれが映^{うつ}ります。映^{うつ}るけれども、理由^{りゆう}は解^{わか}らないのです。私は時々妻^{ときどき}からなぜそんなに考^{かんが}えているのだとか、何か気^{なに}に入^きらない事^いがあるのだらうとかいう詰問^{きつもん}を受けました。笑^うって済^すませる時はそれで差支^{さしつか}えないのですが、時^{とき}によると、妻^かの痛^{いた}も高^{こう}じて来^きます。しまいには「あなたは私^{わたし}を嫌^{きら}っていらっしやるんでしょう」とか、「何でも私^{わたし}に隠^{かく}していらっしやる事^{こと}があるに違^{ちが}いない」とかいう怨言^{えんげん}も聞^きかなくてはなりません。私はそのたび^{くる}に苦^{くる}しみました。

私は一層^{いっそう}思い切^きって、ありのままを妻^うに打ち明^あけようとした事^{こと}が何^{なんど}度もあります。しかしいざという間際^{まぎわ}になると自分^い以外^がのある力^{ちから}が不意^{ふい}に來^きて私^{わたし}を抑^{おさ}え付けるのです。私^{わたし}を理解^{りかい}してくれるあなた^{あなた}の事^{こと}だから、説明^{せつめい}する必要^{ひつよう}もあるまいと思^{おも}いますが、話^{はな}すべき筋^{すじ}だから話^{はな}しておきます。その時分^{じぶん}の私^{わたし}は妻^{おの}に対して己^かれを飾^{かざ}る気^きはまるでなかつたのです。もし私が亡友^{わたくし}に対^{たい}すると同じ^{おな}じような善^{ぜん}良^{りょう}な心^{こころ}で、妻^まの前^{まえ}に懺^{ざんげ}悔^ごの言葉^{ことば}を並^{なら}べたなら、妻^うは嬉^{うれ}し涙^{なみだ}をこぼしても私の罪^{つみ}を許^{ゆる}してくれたに違^{ちが}いないのです。それをあえてしない私^{わたし}に利害^{りがい}の打^だ算^{さん}があるはずはありません。私はただ妻^かの記憶^{きおく}に暗^{あん}黒^{こく}な一点^{いん}を印^しするに忍^{しの}びなかつたから打ち明^あけなかつたのです。純^{じゅん}白^{ぱく}なものに一^{ひとし}雫^{ずく}の印^{いん}気^きでも容^{よう}赦^{しゃ}なく振^ふり掛^かけるのは、私^{わたし}にとって大^{たい}変^{へん}な苦^く痛^{つう}だつたのだと解^{かい}釈^{しゃく}して下^{くだ}さい。

いちねん た わす こと わたくし ところ つね ふあん
一年経ってもKを忘れる事のできなかった 私 の 心 は常に不安でした。私はこの不安を
くちく しょもつ おぼ つと もうれつ いきおい べんきょう はじ
駆逐するために書物に溺れようと力めました。私は猛烈な 勢 をもって勉強し始めたので
す。そうしてその結果を世の中に 公 にする日の来るのを待ちました。けれども無理に目的
を 拵 えて、無理にその目的の達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快です。私はどうしても
も書物のなかに心を埋めていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺めだした
のです。

さい こんにち こま たる で かんさつ いえ
妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも
おやこふたり すわ くら い ざいさん うえ しょくぎょう もと
親子二人ぐらひは坐っていてどうかこうか暮して行ける財産がある上に、私も 職 業 を求め
ないで差支えのない境 遇 にいたのですから、そう思われるのももつともです。私も幾分かス
ポイルされた気味がありましよう。しかし私の動かなくなった原因の主なもの、全 全 全 全
にはなかったのです。叔父に 欺 かれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じ
たには相違ありませんが、他を悪く取るだけあって、自分はまだ確かな気がしていました。
せけん おれ りっぱ にんげん しんねん
世間はどうかともこの己は立派な人間だという信念がどこかにあったのです。それがK
のために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は 急 に
ふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったので
す。

ごじゅうさん
五十三

しょもつ なか じぶん いきょう こと わたくし さけ たましい ひた おの わす
「書物の中に自分を生理めにする事のできなかった 私 は、酒に 魂 を浸して、己れを忘
れようと 試 みた時期もあります。私は酒が好きだとはいいません。けれども飲めば飲める質
でしたから、ただ 量 を頼みに 心 を盛り潰そうと力めたのです。この浅薄な方便はしばらく
するうちに私をなお厭世的にしました。私は爛酔の真 最 中にふと自分の位置に気が付くの
です。自分はわざとこんな真似して己れを 偽 っている愚物だという事に気が付くのです。する
と身振いと共に眼も心も醒めてしまいます。時にはいくら飲んでもこうした仮装 状 態 にさえ
はい こ はず ゆ ばあい で き うえぎこう ゆかい か あと
入り込めないでむやみに沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後には、き
つと沈鬱な反動があるのです。私は自分の 最 も愛している妻とその母親に、いつでもそこ
を見せなければならなかったのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を 解 釈 して掛り
ます。

妻の母は時々気拙い事を妻にいうようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分は自分で、単独に私を責めなければ気が済まなかったらしいのです。責めるといっても、決して強い言葉ではありません。妻から何かいわれたために、私が激した例はほとんどなかったくらいですから。妻はたびたびどこが気に入らないのか遠慮なくいってくれと頼みました。それから私の未来のために酒を止めると忠告しました。ある時は泣いて「あなたはこの頃人間がちが違った」といいました。それだけならまだいいのですけれども、「Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」というのです。私はそうかも知れないと答えた事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔って遅く帰った翌日の朝でした。妻は笑い、あるいは黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどちらにしても自分が不愉快で堪らなかったのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまい酒を止めました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭になったから止めたといった方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣って置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありましようが、私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分、同じ現象に向ってみると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私はしまいKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなかろうかと疑い出しました。

た。そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横通り始めたからです。

ごじゅうし 五十四

「その内妻の母が病氣になりました。医者に見せると到底癒らないという診断でした。私 は 力 の 及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありますし、また愛する妻のためでもありましたが、もっと大きな意味からいうと、ついに人間のためでした。私はそれまでも何かしたくて堪らなかつたのだけれども、何もする事ができないのでやむをえず懐手をしていたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善い事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅しとも名づけなければならない、一種の気分支配されていたのです。

母は死にました。私と妻はたった二人ぎりになりました。妻は私に向って、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなったといいました。自分自身さえ頼りにする事のできない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思いました。また不幸な女だと口へ出してもいいました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解らないのです。私もそれを説明してやる事ができないのです。妻は泣きました。私が不断からひねくれた考えで彼女を観察しているために、そんな事もいようになるのだと恨みました。

母の亡くなった後、私はできるだけ妻を親切に取り扱ってやりました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人を離れてもっと広い背景があったようです。ちょうど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄な点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たにしたところで、この物足りなさは増すとも減る気遣いはなかつたのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いように思われますから。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもぴたりと一つになれないものだろうかとい
ました。私はまだ若い時ならなれるだろうと曖昧な返事をしておきました。妻は自分の
過去を振り返って眺めているようでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃きました。初めはそれが偶然外から襲って来
るのです。私は驚きました。私はぞっとしました。しかししばらくしている中に、私の心が
その物凄い閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に
生れた時から潜んでいるもののごとくに思われ出して来たのです。私はそうした心持になる
たびに、自分の頭がどうかしたのではなかろうかと疑ってみました。けれども私は医者にも
誰にも診てもらおう気にはなりませんでした。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせま
す。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に
命じます。私はその感じのために、知らない路傍の人から鞭うたれたいとまで思った事もあ
ります、こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭うたれるよりも、自分で自分を鞭う
つべきだという気になります。自分で自分を鞭うつよりも、自分で自分を殺すべきだという
考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ま
した。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私
に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたらしいのです。それを思うと、私
は妻に対して非常に気の毒な気がします。

ごじゅうご
五十五

「死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりまし
た。しかし私がどの方面かへ切って出ようと思いつや否や、恐ろしい力がどこからか出て
来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお
前は何をやる資格もない男だと抑え付けるようにいつか聞かせます。すると私はその一言で
直ぐたりと萎れてしまいます。しばらくしてまた立ち上がろうとすると、また締め付けられま

す。私は歯を食いしばって、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っているくせにといいます。私はまたぐたりとなります。

波瀾も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があったものと思って下さい。妻が見て歯痒がる前に、私自身が何層倍歯痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋の中に凝としていた事がどうしてもできなくなった時、またその牢屋をどうしても突き破る事ができなくなった時、必竟私にとって一番楽な努力で遂行できるものは自殺より外にないと私は感ずるようになったのです。あなたはなぜといて眼を睜るかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなったのです。

私は今日に至るまですでに二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹かされました。そうしてその妻をいっしょに連れて行く勇氣は無論ないのです。妻にすべてを打ち明ける事のできないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲として、妻の天寿を奪うなどという手荒な所作は、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります、二人を一束にして火に燻べるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。

同時に私だけがなくなった後の妻を想像してみるといかにも不憫でした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなったといった彼女の述懐を、私は腸に沁み込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止してよかったと思う事もありました。そうしてまた凝と竦んでしまいます。そうして妻から時々物足りなそうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。始めてあなたに鎌倉で会った時も、あなたといっしょに郊外を散歩した時も、私の気分が大した変りはなかったのです。私の後ろにはいつでも黒い影が括ッ付いていました。私は妻のために、命を引きずって世の中を歩いていたようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。九月になったら

またあなたに会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く会う気でいたのです。秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、きっと会うつもりでいたのです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後に残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にそういいました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死でもしたらよかろうと調戯いました。

ごじゅうろく
五十六

「私は殉死という言葉ほとんど忘れていました。平生使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向ってもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月ほど経ちました。御大葬の夜私はいつもの通り書齋に坐って、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去った報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大將の永久に去った報知にもなっていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だといいました。

私は新聞で乃木大將の死ぬ前に書き残して行ったものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のう死のうと、つい今日まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折って、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間死のう死のうと、死ぬ機会を待っていたらしいのです。私はそういう人にとって、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解らないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れません

が、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方ありません。あるいは箇人のもって生れた性格の相違といった方が確かかも知れません。私は私のできる限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己れを尽したつもりです。

私は妻を残して行きます。私がいなくなっても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間に、こっそりこの世からいなくなるようにします。私は死んだ後で、妻から頓死したと思われたいのです。気が狂ったと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思って下さい。始めはあなたに会って話をする気でいたのですが、書いてみると、かえってその方が自分を判然描き出す事ができたような心持がして嬉しいのです。私は酔興に書くのではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとっても、外の人にとっても、徒勞ではなからうと思います。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達で聞きました。他から見たら余計な事のようにも解釈できましようが、当人にはまた当人相応の要求が心の中にあるのだからやむをえないともいわれるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他の参考に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつきおく記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なのですから、私が死

んだ後でも、妻が^い生きて^{いじょう}いる以上は、あなた^{かぎ}限りに^う打ち明^あけられた私の^{ひみつ}秘密として、すべてを
^{はら}腹^{なか}の中にしまっておいて下さい。」